



第99号

発行

令和5年2月28日

責任者

福島県公立学校

退職校長会安達支部

伊藤末吉

## 【巻頭言】

## コロナ禍でも

## 「人との繋がりが大切」



副支部長 佐藤 英之

昨年は、コロナやウクライナ問題と共に災害の多い年でもあった。そのため、テレビを観る機会が多かった。ウクライナ情勢では戦況が気になり、世界のニュースを気にするようになった。コロナでは感染状況を確認するため、定時の情報を観るようになった。ウィズコロナといわれ活動も少しずつ行われるようになってきたが、未だに社会活動が萎縮しているのは事実である。社会が確かに変化している。その変化をどのように捉え、対応していけばいいのか考えさせられる。

先日、できる活動を実施していこうと、公民館の主催で「しめ縄作り」の講習会が行われ、参加してみた。何とか自作のしめ縄で新しい年を迎えることができた。しめ縄を作成しながら、昔はこの家でも自作していたのに、いつ頃から作られなくなったのかが話題になった。私たちの年代の祖父は、間違いなく作っていた。伝承がなくなったのは、家内業から多様な職種になったからではないかという事になり、社会の変化が伝承を難しくしていたのではないかとという結論になった。コロナ禍は社会の在り方に大きな影響を及ぼ

している。例えば、地域の行事は、元々働き方の改革等で参加が難しくなっていたときに、コロナが影響し更に実施が難しくなってきた。しかし、

相次ぐ中止や自粛でも特に大きな生活上の不都合はないと思っている人も多い気がする。私は近所の人でも顔を合わせていない人が増えたことに驚きを覚え、今後の地域社会はどう変化するか気になっている。

学校教育にも大きな変化がある。来年度からは、「二本松実業高等学校」が開設される。小中学校の適正規模等の検討もなされている。ICTの発達は教育活動の中に進出している。先日、コロナ禍で休校になった中学校の生徒の「休校で学んだこと」という文章をみた。普段何気なく会っていた友達と直接会ってその表情を見て、言葉を交わすことが如何に大切かを知った。自分の行動は自分を守るためではあるが、他人を守ることも繋がると思った。医療関係者など多くの人の支えがあつて

守られていることを知ったということである。私も同じ思いで、人と人との繋がりがいかに大切かを感じている。最近では、社内でも社内運動会などの社内行事がコロナ禍前よりも増えているという。それは自分を理解し、相手を理解する重要性が見直されているらしい。学校もここ数年の変化を今後の学校教育の発展につなげるためには、やはり人との繋がりが大切であると思う。コミュニティースクールとして活動している学校が、地域住民との繋がりを更に深め、発展して行くことを期待している。今年度は、本会の活動はコロナ禍の中でも何とか工夫し、計画された活動が実施できた。今年度もコロナや安全に留意し、工夫して活動を実施していかねばならない。何よりも、会員同士の繋がりを大切にしたいと思う。二年後には、退職校長会県大会「二本松大会」が行われる。それをきっかけに更に充実した活動を推進したいと考えている。

【教育随想】

## 学校での学びを持続可能な姿に

安達地区小中学校長会協議会

会長 原 田 真 一 様



昨年十二月に行われました安達支部退職校長会の皆様との懇談会には、多くの先輩方にご参加いただき、ご経験に基づく貴重なご意見を頂戴することができました。誠にありがとうございます。

さて、本校では令和二年度から三年間、県の青少年赤十字研究推進指定校として、「健康安全、奉仕、国際理解」の精神を実践できる生徒を育ててきました。去る十月六日には、その研究成果を公開し、現職教員はもとより退職校長会の皆様を含めた賛助奉仕団の皆様にご覧いただきました。四年ぶりの参集型公開となり、関係する皆様の期待の大きさを強く感じたり一日となりました。そのような期待に十分応える公開となったか、多少不安ではありませんが、真摯に学ぶ生徒とそれに向き合う教師の姿の一端をご覧いただけただのではないかと自負しております。

本研究は本校の教育目標である「自主・自律」の目指す生徒像とも一致して

おり、今後の教育活動の中で、具体的な姿としてますます育てていきたいと考えています。そのような姿を具現化した出来事を、学校公開後の生徒の様子から紹介します。

## 一 強制されない拍手

十一月八日に避難訓練を実施しました。その際、校長講話を行い、生徒にある質問をしました。その質問に一人の二年生が勇気を出して答えました。その時、間を置かずに多くの三年生から拍手が起きました。授業の中では、生徒が答えたことに対して、教師が周囲の生徒に「拍手」と言って強制することがありますが、自然発生的に出た拍手は、発言した二年生にとって、より一層称賛とともに今後の励みになったことでしょう。

## 二 「俺たちもやろうぜ！」

校地内の桜が落葉しきりとなる十一月。JRC委員会の生徒が中心となって、登校後に毎日落ち葉掃除を行っています。私も東側階段の落ち葉掃きをしていたと

ころ、登校してきた三年生の男子生徒が、「おはようございます。俺たちもやろうぜ。」と言って、昇降口に鞆を置き、複数名で落ち葉掃きの手伝いをしてくれました。気づいても実行することには壁があるものですが、実行を妨げる壁が低くなっていることに感動しました。

## 三 困っている誰かのために

これも十一月のある日、庭球場で部活動を終えた二年生の女子生徒が庭球場前の道路に鍵が落ちていたのを見つけました。「落とした人は家に入れず困っているだろう」と鍵を拾い、庭球場に戻って鍵を管理室に届けました。翌日、鍵を落とした方がわざわざ学校にお出でになり、感謝の言葉を述べてお帰りになりました。

JRCと言えば募金と短絡的に考えていた三年前の自分が恥ずかしくなるくらい多くのことを、生徒の姿から学んだ研究指定でした。これらの出来事は学校通信を通して各家庭にも知らせ、今日の嬉しかったことが、毎日の夕食の話題になることをお願いしています。

今後も、退職校長会の皆様のご支援をいただきながら、保護者・地域を巻き込んでJRCの精神が浸透するよう、具体的な生徒の姿で育てていきたいと考えています。

## 退職校長と現職校長との 教育懇談会

今年度も恒例の『退職校長と現職校長との教育懇談会』が、二本松御苑において、十二月二日（金）に本会員二十五名、現職会員三十八名（地区内高等学校長四名を含む）が参加し、開催された。

佐藤英之副支部長の開会のことばに続き、伊藤末吉支部長が挨拶し、本年度の退職校長会の各種事業・活動状況の現状や、教育懇談会の意義などについて話をした。

次に、原田真一小中学校長会



グループ毎の懇談会

協議会会長からは、出席された方々への御礼とともに、今回の懇談会を充実した会にしたいと話があった。

高等学校長代表の伊藤勝宏安達高等学校長からは、地域のさらなる発展のために、小中高連携の重要性などについて話があった。さらに、佐藤正道二本松工業高等学校長から、来年度二本松工業高等学校と安達東高等学校が統合して誕生する「二本松実業高等学校」について説明があった。学科連携・地域連携による実践的な教育を通して、創造性豊かで地域産業の中核を担う人材の育成を目指していること、また、この十二月に進学相談会として体験入学会を行う予定などについて話があった。

教育懇談会は、三年に一度行われているグループ別懇談会の形式で、四つのテーマをもとに現職から話題の提供をしていたり実施された。司会及び記録も現職校長会が務めた。テーマと主な協議内容は、次の「記録」の通りである。

○ ①「生徒指導の今日的課題」  
生活リズムの乱れによる登校

しぶり、国際化への対応について、退職校長会員や現職の小中高校長の視点から、児童生徒に目標をもたせたり、保護者、地域の協力を得たりするなど多角的な意見が出され大変有意義であった。

○ 不登校や生徒指導問題に関しては、各学校で苦勞して対応しているにもかかわらず増加傾向にある。学校のみで抱え込まず関係諸機関やS・C、SSWとの適切な連携が必要である。

### ②「学習指導」

○ 国語、数学だけでなく、全ての教科で力を付けるようにしている。教科横断的な視点が大切である。本人のやる気もてないと向上は難しい。発表力・対話力を付けることが大事。経験している子は説明力がある。タブレットの活用は、障がいのある子のためにも、対話用のツールとしても有効である。

○ 学力を小中高（大）のスパンで捉え、連続性をもった系統的な指導体制を校種間で協力して構築することが大事。コロナ禍において、逆転の発

☆☆心よりご冥福を  
お祈り申し上げます☆☆

武田 昭三様

令和五年一月三十日ご逝去

九十四歳

○ 元大玉村教育長  
○ 元白岩小学校長

☆先生のご功績に

深い敬意と感謝を捧げます。

想で児童・生徒の活動（活躍）の場づくりをしていきたい。また、教壇に立つ者が新たなインプットをし続けることが大切である。

### ③「地域人材の活用」

○ ボランティアの高齢化が課題であることに對し、高齢者は支援することが生き甲斐になっており学校と目的を一つにし、無理のない範囲で一緒になって実施することが大切である。

○ キャリア教育の重要性や部活動の今後のあり方を中心に話し合いを行い、キャリア教育については、教育課程への位置づけ、部活動の地域移行については今までの枠にとら

われず「何が可能か」という発想が重要である。

④「働き方改革」

○ どの学校でも働き方改革をすすめる、在校時間を減らす努力をしているが、厳しい現状である。教職員に対して、管理職が職員の仕事ぶりを認め励ますようにしたい。特に、若い先生方が意欲を発揮してのびのびと活躍できるように

学校づくりを目指すことが大切ではないか。

○ 様々な実践事例を生かして、一つ一つの内容を見直していくこと。その際、管理職だけでなく、職員全員が協力して取り組みながら成果を出していけるとよい。先生方の気持ちを大切にして、業務内容を見直し、進めていくことが大切である。

誠に慶賀の至りと心よりお祝い申し上げます

全退連賀詞会員の紹介

松本 英夫 様



佐久間 正 様



高齢者叙勲受章会員紹介

松本 英夫 様

(元油井小学校長)

瑞宝双光章

表彰された会員の紹介

◇文部科学大臣表彰

地方教育行政功労者

佐藤 吉郎 様

(元大玉村教育長)

◇読売民友写真クラブ

第五七回定例会

自由部門 最優秀賞

「寂寥（枯れハス）」

佐藤 邦英 様

クラブ活動の紹介

フォトαクラブ

写真十何でも可

で生活に目標を！

活動を始めたフォトαクラブも二年が経ち、会員五名で二月に一度の例会を中心に活動しています。写真に加えて俳句などを入れた作品を創るなど、αアルファの自由性や創造性を楽しんでいます。写真の撮り方や見方に加え地域文化の資料など、会員の関心や意欲の高まる内容があり、視野の広まり・深まりを実感しています。当クラブは、次の方針で活動をしています。

○例会は、二ヶ月に一回・奇数月の第二金曜日の午後二時間を原則としています。

○作品の発表機会は、支部総会(四月)・現職校長との教育懇談会(十二月)に加え、地区文化団体(総合文化愛好会)との合同展を年二回(八月と三月)の各二週間、県男女共生セン

ター三階ロビー)実施しています。

○次の二枚の写真は、例会と合同展のようすです。



☆ 趣味は、楽しみ・喜び・苦しみと多くの体験ができます。

★ 会員の中には、写真を全国・県内展に出品する方、絵や写真俳句を楽しむ方、郷土文化を調査しまとめる会を実施する方など様々です。

## 新入会員の挨拶

### 所属アーチエリー協会



渡邊 正仁

退職して一年が過ぎようとしています。再任用は希望せず、その他、就職活動もしませんでしたので現在、正真正銘の無職です。

退職したとはいえ、まだ学校のことを気になるらしく報道で保育所や学校での問題が取り上げられるたびに、現場の先生方のご苦労が目につかび、その大変さに心が痛むと同時に先生方の健闘をひたすら願うばかりです。

さて、私事ですが、現在無職ではありますが大学や教諭時代に携わっていたアーチエリー競技の役員（福島県協会）を仰せつかっています。

アーチエリー競技は一九六〇〜七〇年代に一次のブームがあり、全国的に社会人、大学生を

中心に競技人口が増えました。しかし、練習場や道具、指導者の確保等に難があり、その競技人口は減少の一途を辿っています。本県でも「ふくしま国体」を契機に競技人口が増え、その競技力も高まった時期もありましたが、現在は会員募集や大会運営等に苦勞している状況です。

毎年、高校の新生十数名が新たな会員となりますが、卒業と同時にいなくなってしまうのが常のようです。昔からの会員も高齢化が進み大会参加や審判などもできなくなりつつあります。

この厳しい状況を打破すべく、無い知恵を日々絞っております。アーチエリーは小学生から高齢の方まで幅広い年齢層で楽しめる競技です。基本をマスターすれば個人での練習で上達していきます。オリンピック競技でもあります。

私自身どこまでできるかわかりませんが、楽しみながら協会の発展に取り組みたいと思っております。興味のある方は福島アーチエリー協会までご一報ください。

### ひとやすみ



橋本 淳一

振り返れば、高校二年の時に「盲学校の先生になろう」と考えて進学し、幸いにも卒業後すぐに希望の地に職を得ることができました。そしてまた、退職の時を同じ校舎で迎える事ができた教員人生は、本当に幸せだったと感じております。

三十八年間には、五つの障がい種すべての特別支援学校を経験し、また、教育事務所や特別支援教育センターなどで働く機会もいただきました。教職を終えた今、そこで出会った多くの方々への感謝の思いでいっぱいです。

さて現在は、以前から考えていた「ひとやすみ」の毎日を送っております。

草木の変化に季節を感じ、あこがれていた平日の図書館ではゆるやかな時が流れていきます。何より幸せを感じるのは、陽

光を浴びながらの愛猫とのひととき。孫がおられませんので、再度の子育てのごとく振り回されているのも嬉しく、子ども相手のように会話をしている姿は、おそらく変なおじさんでしょう。

しかし、こうした日々も一年が過ぎようとしている今、そろそろ動き出さないと、このまま頭も体もしぼんでしまいそうな思いも膨らんできました。

教員時代は、障がい児の療育や教育相談に携わることが多かったこともあり、福祉や心理について以前から関心を持っておりました。そのため、退職後はそうした勉強をしたいと考えておりましたが、幸いこの一年で関連の資格をいくつか取ることもできました。春からは新たな場で、学んだことや経験したことを生かす機会があればありがたいと考えております。

退職校長会の皆様には、新しい人生を歩む先輩として教えていただくことも多いのではないかと思います。皆様のご多幸をお祈りするとともに、今後のご指導をお願いし、新入会のご挨拶といたします。

## 新入会員の挨拶

### 生涯学習指導員

としての日々

「二歳から九十歳の  
受講生とともに」



高橋 一彦

三十八年の教職生活が終わり、早九ヶ月が経過しました。現在の勤務場所までの通勤時間が五分、家を出る時刻が二時間も遅くなりましたが、相変わらず起床時刻は五時で、生活習慣をまだ変えられずにいます。

最後の三年間は、小浜中の校長として勤務させていただきました。本宮市出身、小浜には三十年ほど前に居住していたこともあり、気合いを入れて赴任しました。しかし、コロナ禍の中での学校経営は、ままならぬことが多くあり、同窓会やPTAの方々からの協力で無事務められたこと感謝しております。

現在私は、福島市三河台学習センターに勤務し、生涯学習指

導員として高齢者学級と家庭教育学級を担当しています。高齢者学級では、毎月一回、企画会議を八十才近くの運営委員と行っています。その方々は、長年運営に関わっていて、大変要求水準が高く、毎回、企画内容や運営の仕方について遠慮容赦のない意見を出します。気分が落ち込むことがしばしばありましたが、要求に応えようとセンター職員に相談しながら企画内容を練ってきました。その中でも今年度は三年間でできなかったバス旅行を実施することができ、口うるさい運営委員からも良い評価をもらうことができました。参加したお年寄りからも感謝の言葉を掛けられ、教員時代とは違った充実感を味わうことができました。さらに、家庭教育学級では、参加している二歳児のあどけない笑顔に心から癒やされています。

今の仕事は、教員時代よりもより一層深く地域と関わらなければ成功しない仕事です。これからの地域のために地域の人のつながりを様々な模索していきたいと思っています。

## 定年退職を迎えて



佐藤 則之

令和四年三月末日をもって定年退職を迎え、翌四月一日から大玉村立玉井小学校に再任用校長として着任し、現在に至ります。

新任教頭となり安達地区を離れ瑞町に単身赴任以来、二本松南小学校に校長として着任するまでの十二年の間に、地区内の先生方の顔ぶれが随分変わってしまったなと思いました。それは、教職員関係者名簿をめぐっても、初めて目にする先生方の名前の方が多いように感じたからです。十二年というものは、それだけ長い年月だということを感じて感ぜました。

校長として定年退職を迎えながら、再任用校長として学校現場で今までと同じように勤務しているために、今年度から退職校長会の末席に加えて頂きながらも、現職の校長会にも所属し

二足の草鞋状態となっているため、定年退職したようなしないような不思議な気持ちを感じています。定年を迎えても職種が一緒なので、やることは変わりません。ただ、今の再任用校長職が終わりを迎えた時、第二の人生をどのように過ごし生きていくかということ、定年退職以前にも増して考えている自分があります。

亡き父が幼少期を過ごした家は、大叔父が戦前写真屋を営んでいたため、当時の写真やガラス乾板が多く残されていました。この一年の間に私の手元にもいくつか譲り受けたものがあります。曾祖父が針道小、祖母が北戸沢小の教員であったこともこの一年の間に確認できたことです。

第二の人生の過ごし方の中に、祖先の生き様に触れる機会を是非つくりたいと、昔の写真を見ながら考えています。

